

『歴史に学ぶ地域再生～中国地域の経世家たち』の刊行

エネルギー総合研究所 経済・産業調査担当 増矢 学

当研究所では、平成20年9月に、(社)中国地方総合研究センターと共同で『歴史に学ぶ地域再生～中国地域の経世家たち』と題する冊子を刊行しました。

この冊子は、昨年度に実施した調査研究の成果をもとにして、作家の童門冬二先生の「江戸時代の経世家に学ぶ」を巻頭論文に、中国地域で活躍した5人の経世家の事績をとりまとめたものです。

近年、中国地域をはじめとする地方圏では、少子高齢化、企業活動のグローバル化、大都市圏との格差拡大が進展する中で、地域再生へ向けての取り組みが重要な課題となっています。

時代を江戸時代にさかのぼると、第8代将軍の徳川吉宗の頃になると武士や農民の生活は、米経済から商品貨幣経済へという大きな波にのまれながら次第に困窮化していきました。こうした事態に各藩では、財政改革、特産品開発、人材育成を積極的に進めましたが、その重責を担ったのが、確かな政策理念と高い志をもった経世家たちです。

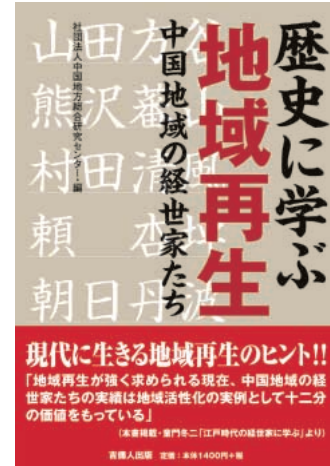
なお、「経世」とは経済の語源である“世の中を治めて苦しんでいる民を救う”を意味する「経世済民」に由来します。以下では、今回取り上げた5人の経世家のプロフィールを紹介します。

山田方谷(やまだほうこく 1805～77): 備中(岡山県)松山藩士。幼年期から学問に秀で、当代一流とされた江戸の佐藤一斎塾で学頭を務めた。実務的には熊沢蕃山を尊敬し、その深い学識や高尚な人柄から「備中聖人」と称えられている。

藩財政の再建や「備中くわ」の考案などの産業振興に力を尽くし、晩年は故郷で私塾を開き、岡山の閑谷学校を再興するなど人材育成にも情熱を傾けた。

熊沢蕃山(くまざわばんざん 1619～91): 備前(岡山県)岡山藩士。蕃山の生まれは京都で、日本で最初の陽明学者である中江藤樹に師事した。主人は名君といわれた池田光政である。彼は単に行政だけではなく治山治水・飢餓対策・人材育成などに尽力した。

彼は代表的な経世論である『大学或問(だいがくわくもん)』の中で辛辣な幕政批判を展開したため、晩年は茨城県古河で軟禁生活を余儀なくされた。



村田清風(むらたせいふう 1783～1855): 長門(山口県)三隅(みすみ)の出身。幕末長州藩の家老として、専売制や藩営商社設置などによって近代にも通じる財政改革に努力した。吉田松陰は清風の信奉者で、松下村塾で学んだ門人たちが清風の改革を盛り立てた。そしてこの成果が、長州藩が倒幕戦争を起こすための資金獲得に貢献したといわれている。

頼 杏坪(らいきょへい 1756～1834): 安芸(広島県)竹原の出身。彼は頼春水・頼春風とともに「三頼」とよばれた学者で、『日本外史』の著者として有名な頼山陽は甥にあたる。広島藩では御納戸奉行として活躍し、県北の三次で郡政を担当した。

学問も深く慈愛の精神に満ちていたので、地域住民から慕われた。彼が主張した地域格差の解消策は今日でも傾聴に値するものがある。

朝日丹波(あさひたんば 1705～83): 出雲(島根県)松江藩の家老。藩主は文化大名として有名な松平不昧(まつだいらふまい)である。彼の改革は徹底した勸農抑商政策で、藩内の農業産品に付加価値を高めた。主人の不昧はこの改革で得た益金で日本中の名茶器を買い集め、藩の文化政策を推し進めた。

不昧の理念をよく理解していた丹波は一連の改革に対する批判を一身に引き受けた。今日まで続く松江の茶道文化はこの丹波の身を挺した改革の賜物である。